

2001年7月15日

歴史に学ぶとは

～ サムエルが敗北から学んだこと ～

【聖書】サムエル記上 7章2～17節

7:2 主の箱がキルヤト・エアリムに安置された日から時が過ぎ、二十年を経た。イスラエルの家はこぞって主を慕い求めていた。

7:3 サムエルはイスラエルの家の全体に対して言った。「あなたたちが心を尽くして主に立ち帰るといふなら、あなたたちの中から異教の神々やアシュトレトを取り除き、心を正しく主に向け、ただ主にのみ仕えなさい。そうすれば、主はあなたたちをペリシテ人の手から救い出してくださる。」 7:4 イスラエルの人々はバアルとアシュトレトを取り除き、ただ主にのみ仕えた。

7:5 サムエルは命じた。「イスラエルを全員、ミツパに集めなさい。あなたたちのために主に祈ろう。」 7:6 人々はミツパに集まると、水をくみ上げて主の御前に注ぎ、その日は断食し、その所で、「わたしたちは主に罪を犯しました」と言った。サムエルはミツパでイスラエルの人々に裁きを行った。

7:7 イスラエルの人々がミツパに集まっていると聞いて、ペリシテの領主たちはイスラエルに攻め上って来た。イスラエルの人々はそのことを聞き、ペリシテ軍を恐れて、7:8 サムエルに乞うた。「どうか黙っていないでください。主が我々をペリシテ人の手から救ってくださるよう、我々の神、主に助けを求めて叫んでください。」

7:9 サムエルはまだ乳離れしない小羊一匹を取り、焼き尽くす献げ物として主にささげ、イスラエルのため主に助けを求めて叫んだ。主は彼に答えられた。 7:10 サムエルが焼き尽くす献げ物をささげている間に、ペリシテ軍はイスラエルに戦いを挑んで来たが、主がこの日、ペリシテ軍の上に激しい雷鳴をとどろかせ、彼らを混乱に陥れたので、彼らはイスラエルに打ち負かされた。 7:11 イスラエルの兵はミツパを出てペリシテ人を追い、彼らを討ってベト・カルの下まで行った。 7:12 サムエルは石を一つ取ってミツパとシェンの間に置き、「今まで、主は我々を助けてくださった」と言って、それをエベン・エゼル（助けの石）と名付けた。

7:13 ペリシテ人は鎮められ、二度とイスラエルの国境を侵すことはなかった。サムエルの時代を通して、主の手はペリシテ人を抑えていた。 7:14 ペリシテ人がイスラエルから奪い取っていた町々は、エクロンからガトまで再びイスラエルのものとなった。イスラエルはその周辺の村々をもペリシテ人の手から救った。イスラエルとアモリ人との間は平和であった。 7:15 サムエルは生涯、イスラエルのために裁きを行った。 7:16 毎年、ベテル、ギルガル、ミツパを巡り歩き、それらの地でイスラエルのために裁きを行い、7:17 ラマに戻った。そこには彼の家があった。彼はそこでもイスラエルのために裁きを行い、主のために祭壇を築いた。

【序】教科書の違い

6月19日と昨日の7月14日の英字新聞”The Straits Times”に日本の「新しい歴史教科書」の市版本がカラー写真付で大きく取り上げられていました。この教科書をつくった会の西尾会長はこう言っています。「過去のそれぞれの時代には、その時代に特有の善悪があり、特有の幸福があった。

今の時代の基準からみて、過去の不正や不公平を裁いたり、告発したりすることと、歴史を学ぶことは、同じではない。歴史を裁判の場にすることはやめよう」。この教科書が大幅な修正を受けながらも検定に合格したばかりでなく、2002年度版の中学教科書7冊から「東南アジアへの侵略」の表記が小見出しから消え、「華僑虐殺」についての記述も4冊に減少するそうです。

一方シンガポールでは、これまで日本による占領の歴史を中学一年で学んで来たものを、昨年からは小学校四年生から学び始めるようになったそうです。これは10年ごとの学習指導要領の改訂に伴うもので、愛国心や国防意識を育てるのが狙いだそうです。教育省は「日本や特定の国を批判する意図はない。国防の重要性を理解させたい」と言っていますが、歴史の知識や見方で日本とのギャップがますます広がっていきそうです。

このような時期に、二人の高校生の投書が先月の朝日新聞の「声」の欄に載っていました。一人はアメリカの現地校時代にクラスで一緒に映画「戦場にかける橋」を観た時のつらい思いを書いた16才の伊東さん。もう一人は現在シンガポールで国際校に通っている18才の河合さん。彼女は私の剣道の生徒で、「パールハーバー」をイギリス人の友人と観た後で、お互いに自分の国の歴史や自分の理解を話合ったそうです。「違う視点から歴史を学んだ人々と話し合うことは、これから私たちが共に暮らしていく中で、必要なことだと思う」。

8月8日(水)から12日(日)にかけて、日本のバプテスト諸教会から中高生4人、青年4人、婦人4人、スタッフ2人の計14人がシンガポールに来ますが、航空券の一番高いこの時期にしたのは、9日の National Day を体験していただきたいからです。戦争時代の記念碑をたどるバスツアーも計画しました。教科書もぜひ買って、読みたいと希望しておられます。有意義なシンガポール訪問になるように、願っています。

さて私たちは、サムエル記上を礼拝の説教で読み進めてきました。サムエルは、3050年ほど前、神の民イスラエルに王制が布かれるようになった歴史の転換期に指導的役割を果たした士師・祭司・預言者です。彼は大祭司エリに育てられましたが、イスラエルがペリシテとの大決戦に敗れ、エリは死にました。日本も1945年8月15日に連合軍に無条件降伏した経験を持ちますが、この時のイスラエルの敗北の方がはるかに深刻だったと、私は繰り返し申し上げました。

では、日本人は世界を相手に戦争をして敗北した歴史から、何を学んだのでしょうか。歴史に学ぶとはどういうことかが今、問題になっています。それを覚えながら、イスラエルがあの時どうしたかを、学びたいと思います。

[1] サムエルの敗戦体験

神の箱を分捕って大勝利に沸いたペリシテ人たちは、神の手に打たれて悲鳴をあげ、七ヶ月後に賠償金をつけて、神の箱を送り返えしてきました。そして神の箱は、破壊されたシロの神殿に代わり、キルヤト・エアリムのアビナダブの家に置かれました。それから20年が経ち、いよいよサムエル

がイスラエルの指導者として登場します。

あの大敗北とエリの死の時、サムエルは30才位ではなかったかと言われてます(他に20才説、40才説等があり、はっきりしません)。するとこの時彼はすでに50才になっていたことになります。では敗戦後の20年間を彼はどのように過ごしていたのでしょうか。

私は9才の時にシンガポール陥落を提灯行列で祝いました。この戦争はアジアの諸国を植民地支配から解放し、天皇を戴く神の国日本を中心にアジアは一つになって、共に栄えていくための聖戦だと教えられ、自分も強い軍人になろうとして軍国主義のスパルタ教育を喜んで受けました。ですから歴史始まって以来初めての敗戦で、13才の私は、人生の目標を失ってしまいました。また教科書の誤りを墨で塗りつぶす作業をさせられて、自分たちは嘘をこんなに教えられてきたのかと、大きな衝撃を受けました。さらに戦争裁判でアジア諸国への侵略と虐殺を知らされ、知らなかったでは済ますことの出来ない戦争加担者としての自分の責任を、強く自覚するようになりました。そして廃墟の中で、真理を求め、生きる意義を探して、聖書を手にするようになり、教会に導かれてイエス・キリストに出会ったのです。キリストは私を伝道者に召してくださいました。以来私は牧師として、本当に有難い人生を過ごさせていただきました。でも自分が軍人として出て行こうとしたアジアの国々のことを、忘れることが出来ませんでした。そこでシンガポール・バプテスト連盟の招きに応じて、伝道者の働きの締め括りをしたいと、63才でこちらに参ったわけです。1995年5月のことです。

私は家も学校も焼けてなくなり、神の国日本も亡くなると共に、人生の目標も失ってしまった自分の経験に照らして、サムエルを考えてみました。彼は大敗北と共に、育ての親であり、恩師であるエリを失い、神殿を破壊され、神の箱も奪われてしまったのです。30才の彼にとって、何もかも失ってしまったと言う思いは、13才の私をはるかに超えた深いものであったに違いありません。エリ一族の祭司たちは、シロを破壊された後で、ノブの町に住み着きましたが(21:1、22:11、18~19)、サムエルは、エリの子か孫のように育てられながら、エリの死後、その一族から離れて独りになったようです。7章の終わりに、サムエルのその後の生涯が要約されています。それによりますと、ラマに住み、人々の訴えごとを裁き、祭壇を設けて礼拝を捧げ、また各地を定期的に巡回して、訴えごとを裁いて過したようです。

サムエルは、ノブの祭司たちとの接触が無いばかりか、キリヤト・エアリムに戻って来た神の箱とも接触していない様子です。そしてサウルやダビデを王に任命する過程の中で、彼と「預言者の一団」との関係が明らかになってきます(10:5以下、19:19以下)。預言者制度の芽生えを意味しているのではないかとされている記事です。ご存知のように旧約聖書は、律法、歴史、文学、預言で構成されています。預言者の預言活動が大変重要な役割を果たしました。そしてサムエルが、この預言者制度の創設に係わった最初の人物ではないかと見られているのです。

今から3000年以上も昔のことで、資料もごく限られたものしかありませんが、サムエルについて私はこういうことが言えるのではないかと思います。彼はエリから、人々の訴えを聞いて裁く士師の

働き、礼拝の祭儀を行う祭司の働きを学びました。しかしエリという優れた士師、祭司でも大敗北を招いたのです。「ではどうしたらよいか」をサムエルは独りになって懸命に捜し求めた、そして預言者の働きと役割の自覚に達したのです。

[2] 人生の基本的姿勢

7章5～6節をご覧ください。サムエルが命じました。「イスラエルを全員、ミツパに集めなさい。あなたたちのために主に祈ろう」。人々は集まりました。そして水を注ぎ断食して「わたしたちは主に罪を犯しました」と告白し、自分たちの悔い改めを表わしました。2節との関連からみて、大敗北から20年後のことでしょう。

サムエルがその日に至るまで、イスラエルの人々に語り続けて来た言葉が3節です。「心を尽くして主に立ち帰ろう。心を正しく主に向け、ただ主にのみ仕えなさい。神々を取り除きなさい。そうすれば、主はあなたたちをペリシテ人の手から救い出してくださる」。この言葉自体は新しいものではありません。律法の授与者モーセが2～300年前に既に語っています。

「あなたの神、主のもとに立ち帰り、わたしが今日命じるとおり、あなたの子らと共に、心を尽くし、魂を尽くして御声に聞き従うならば、あなたの神、主はあなたの運命を回復し、あなたを憐れみ、あなたの神、主が追い散らされたすべての民の中から再び集めてくださる」(申命記30:3)。この神さまの基本的なお言葉を、人々が一番必要としている時に、はっきりと語り続けることが預言者の役割です。サムエルは士師・祭司の働きを断ち切って預言者の働きに専念したわけではありません。そのような預言者の登場はまだ先のことですが、しかし士師の時代から王制の時代へと移っていく歴史の転換期に、サムエルは説教をもって悔い改めをせまる預言者の働きによって歴史に貢献したのでした。

どうしてイスラエルは大敗北したのでしょうか。それは先ず第一に、指導者エリと息子たちへの神の裁きでした。後を継いだならず者の息子たちが悔い改めようとしない罪、その息子たちを悔い改めさせることの出来なかったエリの罪。息子たちはどうして神の裁きを恐れなかったのでしょうか。戦死者34000人。大勢の人を巻き添えにしています。エリもこんな息子たちを祭司から降ろせばよいのに、その決断ができませんでした。ずーっとやってきたことをおいそれと変えられない優柔不断さが厳しく問われたのでした。

第二に神さまを自分に都合の良いように引き回そうとした人間の高ぶりに対する神さまの裁きです。イスラエルの人々はどうしてもペリシテに勝たなかった。自由になりたかった。12部族が一つの願いで結集して戦争できる態勢が整いました。これだけの人数が集まれば勝てると思いました。ところが最初の戦いで4000人が死に、負けてしまった。「そうだ、神さまに来ていただく」と、神の箱をシロの神殿から運んできた。全軍は大歓声を上げて喜びましたが、神さまの前にへりくだって礼拝を捧げ、神さまの指示を仰ごうとはしていません。かえって彼らの大歓声がペリシテを死に物狂いにしてしまいました。皮肉なことです。結局普段はほったらかしにしていた、さあ困ったという時になっ

て、神さまを引っ張り出して働かせようとしただけです。

神の箱を分捕ったペリシテも、イスラエルの神を自分たちの神に仕えさせようとしていました。自分たちの強さを示す飾り物の一つにしようとしていました。ところがその傲慢さを神さまに打たれて、七ヶ月で神さまに降参してしまいました。賠償金を添えて返してよこしました。神さまを自分の召使、僕にしてはならない、私たちのほうが深い畏れをもって、そのお言葉にまったく聞き従う僕になるという基本的姿勢の大切さが明らかにされた出来事だったのです。

何もかも失い、打ちのめされた敗北経験の中で、サムエルが独りになって祈り求めた結果つかんだ結論も、この信仰の基本姿勢をもう一度立て直すことだったのです。「心を尽くして主に立ち帰ろう」——神さまを主とし、自分たちは僕になる所にいつも立って、自分はどう生きるか、何をするかを決めていく。そこに新しい歴史が開けてくるのです。

[3] 征服者日本人の無慈悲

サムエルの説教が少しずつ少しずつ人々の心にしみわたって行きました。何年かかったことでしょうか。とにかくイスラエルの全員がミツパに集まって、自分たちの根本的な誤りをはっきり認めて「わたしたちは主に罪を犯しました」と告白する集会をするまでになったのです。するとたちどころに状況に変化が現れ始めました。イスラエルの結集を危険視したペリシテが、戦争をしかけて来たのです。

イスラエルの人々は恐れしました。しかし20年前のように、兵力を集めて数の上で対抗しようとはしませんでした。神の箱を担ぎ出そうともしませんでした。「我々の神、主に助けを求めて叫んでください」とサムエルに祈りを求めたのです。

サムエルは小羊一匹を焼き尽くす献げ物として献げながら、神さまに祈りました。すると激しい雷雨がペリシテ軍を襲い、大混乱が生まれました。それでイスラエルは山を駆け下って行って攻めかかり、ペリシテ軍を国境の向こうへ押し戻してしまったのでした。サムエルは石を一つ取ってミツパとシェンの間に置き「今まで、主は我々を助けてくださった」と言って、それをエベン・エゼル(助けの石)と名付けました。

エベン・エゼルは20年前にイスラエルが大敗北を喫した場所です。位置的に同じであったかどうかははっきりしませんが、まさに大敗北した地で我々は遂に大勝利を得ることが出来たことを、サムエルは明らかにしたかったのでしょう。この違いはどこからきたのか。「我々が変わったからだ」とサムエルは言いたかったのです。

20年前は武器や兵力で勝とうとしました。しかし今回は神さまが全能の力をあらわしてくださったので勝てた。自分の力に依り頼み、誇り高ぶることをやめ、神の前にへりくだり、謙遜になった時に、天地の創造者・全知全能の神さまがお働きくださり、勝利をもたらしてくださったのです。人間が主

人となって神を僕とする時に敗北する、神を主とし人間が僕となる時に勝利がもたらされる——この人生の根本をイスラエルは、敗北後20年かけてやっと学ぶことができたのでした。

3年前にリー・クアンユーが日本経済新聞の「私の履歴書」に30回連載記事を書きました。1959年に英連邦自治州だったシンガポール時代から31年間首相を務めた建国の父と言われる人です。彼はこう書いています。

「英国の敗北の意味を、今のシンガポールの若者が理解するのは難しいと思う。永遠に続くと思いついていた英国支配が70日間の攻撃で崩れ去ったのだ。それまで白人の優越性には疑う余地がなかった。英国人だけでなく白人はボスだった。我々はそれに何の恨みもなく、単に人生の現実として受け止めていた。しかし、いまアジアの一民族が彼らに挑み、白人優越の神話を打ち砕いてしまったのだ。しかし、日本人はいったん征服者になるとアジアの同胞にたいして、英国人より無慈悲であることを示した。私は日本の軍国主義を一貫して批判しているが、私自身や友人たちの忘れ難い体験に基づいてのことである。」

多くの日本人は私を含めて「この戦争はアジアの諸国を植民地支配から解放し、天皇を戴く神の国日本を中心にアジアが一つになって、共に栄えていくための聖戦だ」と教えられ、その通りに信じて戦争に参加しました。たしかにあの戦争は白人優越の神話を打ち砕いたでしょう。第二次世界大戦後に、シンガポールをはじめ植民地がほとんど独立しました。

だから日本は良い事をしたんだという意識が日本人の心の中であって、大臣の発言にポロポロ出てきます。しかし日本の掲げた理想と現実は違いました。リー氏の言葉「しかし日本人は、いったん征服者になるとアジアの同胞に対して、英国人より無慈悲であることを示した」は痛烈です。どうしてこうだったのでしょうか。

日本人が傲慢だったからにはほかありません。アジアの主人公気取りだったのです。だからだれからも支持されず、叩きのめされたのです。パールハーバーを見た後でイギリス人の友人と話し合った河合さんは、こう言いました。「違う視点から歴史を学んだ人々と、歴史について話し合うことは、これから私たちが共に暮らしていく中で必要なことだと思う」。そうですね。そして私たちに謙虚な学び合いをさせるのは、皆が同じ兄弟なんだという平等・公平な自覚ではないでしょうか。

自分の国に誇りを持つことと、傲慢になることとは違います。神の国だなどと自分を神の座に据えるから、他のあらゆるものがみな自分の僕になってしまったのです。植民地支配で苦しむアジア諸国に僕として仕えていく心を基本に据えなかったところに、私たち日本人の根本的な誤りがあったのです。

【結】 敗北を勝利に

皆さん。日本人の多くは神を信じなくても特に不都合はない、普通に生きていけると考えておら

れます。病気とか試験とか災難に直面した時だけ神社やお寺に行って手を合わせ、お守り札をもらいます。私たちの世代は「テルテル坊主」の童謡で育ちました。こんなに一生懸命お願いしても聞いてくれないければ、「そなたの首をチョンと切るぞ」と歌いました。神さまは人間の召使なのです。

「その人を幸福にしたいのなら、その人の欲望を取り除いてあげなさい。」(エピキュロス)

自分の欲望をかなえてくれる神を選び、だめならその神を捨てるのでは、私たちの欲深さはそのままです。それで私たちは本当に幸福になるのでしょうか。神さまの清く正しい言葉に絶えず聞き従おうとする時に、はじめて他の人とも正しい関係をむすび、共に助け合って生きていけるようになるのではないのでしょうか。

人間も国家も知らず知らずのうちに、傲慢になっていきます。そして失敗します。誇りと高慢とは違います。謙遜と卑屈とはちがいます。神さまからこよなく愛されている自分を大切にしながら、人の汚れた足を洗う謙遜さを求めて生きていく——これは神さまという絶対者の前にわが身を置くことによって、初めて得られるものです。

「新規蒔き直し」と言いますが、蒔く種が同じなら、いくら蒔きなおしても同じ花、同じ実しか得られません。名前を変えたり、印鑑を変える人がいます。自分を変えよう、商売のやり方を変えようと言う決意からでしょうか。でもどうやって変えるのでしょうか。

サムエルは何もかもを失った敗北から、「心を尽くして主に立ち帰る」ことしかないと学び取りました。そしてその事を繰り返し人々に説きあかし続けて、新しい歴史を開いていったのでした。私も日本の敗戦の歴史から、サムエルと同じことを学び取りました。そして今日シンガポールに身を置いています。日本はアジアに仕える僕にならなければなりません。

「取り返しのつかない大失敗をした」と絶望して人生を捨てる人がいます。でもイスラエルは生きる姿勢の基本を変えた時、大敗北したエベン・エゼルで大勝利を得ました。私たちの心が変われば、人生も変わります。そのために先ず自分を神さまの前に置いて、静かに神さまの言葉に耳を傾け、自分を変えて下さいと心を注いで祈りましょう。神さまは私たちを必ず導いてくださいます。神さまに聞き従う人生に絶望はないのです。